

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：34317

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25340150

研究課題名(和文)社会合意形成を実現するマンガの機能構築

研究課題名(英文)On Building Social Consensus through Designing a Function for Manga(Sociability practice Manga)

研究代表者

竹宮 恵子(TAKEMIYA, Keiko)

京都精華大学・マンガ学部・教授

研究者番号：80330033

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：神戸大学との共同研究で行なった社会リスクコミュニケーションについての考察を活かし、平成26年度には「震災時のアスベスト飛散による社会リスク対策」としての『震災とアスベスト』マンガパンフレット制作と配布を行なったが、平成27年度中には中・韓国語に訳した。さらに平成28年度には英訳を試み、日・中・韓・英語版が神戸大学のリポジトリに納められた。単純に他言語に置き換えるだけではすまないマンガ翻訳の様々な問題を確認し、制作だけでなく翻訳にもマンガ・リテラシーが重要であること、今後の研究がさらに必要であると実感した。その他に、科研費の繰り越し申請をして前年からの懸念であった作業「マンガ言語調査」に臨んだ。

研究成果の概要(英文)：In 2014, drawing on valuable insights gained through collaborative research with Kobe University on Risk Communication, we produced and distributed the manga in pamphlet format, "Disasters and Asbestos," as part of a social risk policy to address the problem of asbestos dust dispersal in disasters. In 2015, we translated this manga into Chinese and Korean, and in 2016, an English translation was completed. As an outcome of this research, versions of the pamphlet in four languages were donated to the Kobe University Repository. Through this project, we were able to identify numerous problems in manga translation indicating that such translation is not simply a matter of inserting one language in place of another; both technical skill in production and a high level of manga literacy are important, and further research in these areas is required. In addition, we have applied for carry-over funding, hoping to continue research on "the language of manga" an inquiry of ongoing interest.

研究分野：マンガ

キーワード：社会合意形成 アスベスト マンガ マンガ・リテラシー 震災 石綿 マンガと哲学

1. 研究開始当初の背景

(1) 『石の綿～マンガで読むアスベスト問題～』出版からの経緯

上記のマンガ本は平成24年の刊行である。マンガで社会問題を取り扱うことは、社会性・平等性を保ちつつ感情移入できる作品に仕立てることが難しく、関わる制作側の態度を一定水準以上に保つことが肝要となる。例えば被害者側に踏み込みすぎないことや、説明に終始してマンガに仕立てる意味を失わないようにすることなど、かなりの高度な倫理と哲学的な態度が必要となる。マンガの底辺の拡がりには凄まじく、いつかは社会問題にも及ぶべきことと考えてはいたが、その機会は意外にも早く訪れた。日本におけるアスベスト問題を尼崎という地に定めて長年社会倫理の創成を研究して来た神戸大学から、アスベスト問題のマンガ化を依頼されたのである。本研究は上記の本の出版を企画し、平成22年に神戸大学との共同授業が始まったあたりから開始された。255ページに及ぶこの本の刊行まで、3年に及ぶ長い作業となったが、神戸大学との共同研究によるこの作業ベースがあつてこそ、本研究も存在し得たと言える。本研究は『社会合意形成を実現するマンガの機能構築』と名付け、その考え方で作られるマンガを、実用マンガと区別するために『機能マンガ』(Sociability practice Manga)

と呼ぶ。理想的な社会問題マンガのカタチを、どう構築していくかがテーマである。

(2) マンガ冊子制作のクライアントとなった神戸大学人文学研究科との共同作業は、机上の制作だけでは完成し得ない、社会との関わりをしっかりと把握出来る意味のあるプロジェクトとなった。その経験からこの研究の必要性が生まれたと言える。重要なのは、このような社会性を持ったマンガがどのような注意を払って作られるべきであるか、クライアントとの間の折衝や合意をどのように形作るか、またその結果生み出されたマンガがどのように受容され、社会合意形成に発展していくのかを確認し、記録し、それを元に議論することである。さらにそれが、確実な方法論として確立され、それを教授できるメソッドが形作られることが、さらにその先にある

目標となる。

(3) 神戸大学人文学研究科・倫理創成プロジェクトのネットワークを使い、そのアクション・リサーチから、本研究のテーマである社会合意形成を実感でき、一定の確認が得られた。京都国際マンガ研究センターにて『石の綿～マンガで読むアスベスト問題～』出版プロジェクトに関するシンポジウムを行ない、そこではこの活動内容の共有者であるアスベスト被害者の会や被害者の家族、またアスベスト問題を報道して来た新聞記者などからも、マンガで社会問題を扱う意義が確認された。

2. 研究の目的

この研究の目的は、機能マンガ(Sociability practice Manga)という新しい領域を構築するためのものである。これまでは一般的な呼称でFunctional Mangaと称していたが、より明確にSociability practice Mangaと呼ぶことにする。「社会合意形成を実現する」とは、マンガによって社会問題などの難しいテーマを簡単かつ手早く説明し、理解共有させ、さらには読者をその問題について意見を言える存在に育てることである。そのような目的でマンガをつくるには、全方位的な説得力を持って読者全員が問題を共有できるよう、必要な情報をしっかりと説明しなくてはならない。マンガが持つ共有性はいったいどのようにして作られてきたのか、マンガ言語の発展と変容を知り、その機能を確実に構築することが必要である。実作を通じてその方法を探りつつ、「マンガ言語調査」を行ってマンガにおける言語としての機能を止揚する試みに手を付けたいと考える。その上でマンガ言語の発展と変容を認めつつも、その発展が行き過ぎて読者を限定することのないように、機能マンガの作者は努めなくてはならない。実作によって機能マンガが守るべき範囲を確かめ、かつ可能ならその範囲を明文化することも行なうべきである。

3. 研究の方法

(1) 実作を通じての方法

『マンガで読む震災とアスベスト』(32ページ)冊子制作。この冊子のテーマはアスベスト社会問題の全容を取り扱った『石の綿～マンガで読むアスベスト問題～』が重厚すぎて手軽に手に取れないという欠点を回避し、

身近な地震のがれき撤去にポイントを絞り、烈震が起きた地域では一般の学生でもがれき撤去のアルバイトをすることが考えられるため、アスベスト2次被害の注意喚起を目的に作る。可能であればそれを他言語に翻訳し、アスベスト問題を世界の問題として広めていくようにする。マンガという媒体が国境を越えやすいこと、理解されやすいことを最大限に使っていく。

(2) マンガ言語調査

マンガの言語的表現の発達を調べるため、発達のスパンを大体5年と仮定して1950年から2000年まで5年ごとに分け、少年マンガと少女マンガのカテゴリーに分ける。その上で言語的表現を10個のカテゴリー別に、1.吹き出し形状 2.走る 3.オノマトペ 4.ハッと気づく 5.叫ぶ 6.赤くなる(恥ずかしい) 7.部屋を出る 8.泣く 9.強い否定 10.激昂に分け、それぞれ10例ずつを図版で集めることとし、偏りのない調査になるよう、あえて意図を理解しない学生に収集させた。それらをExcelの表に落とし込み、簡単に比較でき、微妙な差異を確認できるように試みた。

4. 研究成果

(1) マンガで読む『震災とアスベスト』(他言語版含む)の制作

『石の綿』の次に、同じ神戸大学人文学研究科と取り組んだのが、この小冊子・マンガで読む『震災とアスベスト』である。『石の綿』と比べ、こちらは目的も表面上の姿も違う冊子となった。わずか32ページ、制作目的は、地震被害にあった現地で被害者や作業員に手渡しで配布し、地震後に「アスベストの危険性を出来るだけ早く確実に理解してもらう」ためのものである。平成23年に起きた東日本大震災のあと『石の綿』が活用されることを願ったが、マンガとはいえ内容が重厚で手軽に読める本ではないため、もっと簡単に啓蒙できるパンフレット様の小冊子制作が望まれた。マンガでこのページ数となると当然ながら情報を思いきって割愛しなければならず、その打ち合わせは難航した。情報の取捨選択はマンガ制作において非常に重要で、最終的には描く側の技術にも大いに左右される。ク

ライアント側の盛り込みたい情報を文字で付け加えることも考えられたが、厳しいやり取りの末、最終的に「手軽で誰にでも手に取れる」ことが選択された。しかしながらこの冊子が完成したのは平成25年度で、震災から2年が経過している。25年度夏休みに被害地域の取材をして冊子の完成を目指したが、この冊子をもって啓蒙するには時既に遅く、がれき撤去に従事した人々の中にはアスベスト飛散の2次被害も出ていた。神戸の震災での被害を思えば、もっと早く行動すべきだったと悔やまれた。熊本の震災のがれき撤去には間に合うことを願うものである。このようにアスベスト被害は、常に問題が起きてから長い時間が経過したあとに発見される。手を打つのは早いに越したことはなく、むしろ予防知識として火災防止などと同様に扱われても良いものとする。アスベスト飛散の危険性は、ごく一般に誰もが知る知識となることが望ましい。

26～27年度には冊子の完成とともに配布とその検証を行ない、そして外国への波及も願って、中・韓国語にまず翻訳した。京都精華大学マンガ研究科に中・韓の留学生が多く存在し、マンガ・リテラシーのあるネイティブ翻訳者が得られたためである。京都精華大学マンガ研究科は日本語2級を有することが入学条件であるが、その理由は日本語とマンガ言語の密接な関係を知ることが、マンガ言語を理解する鍵となるからに他ならない。翻訳にあたった留学生らは、翻訳すべき『震災とアスベスト』だけではなく、翻訳の必要性を知るためにその前段となる『石の綿』をも読破し、中・韓国民へ向けても発信すべき内容であることを強く認識して任に当たった。その作業で得た新たな知は、マンガ翻訳においては、単純に翻訳者が語学堪能であるだけでは足りないという確信である。マンガ翻訳は、今後新たな仕事分野としても開発可能な部分が充分にあると感じられた。

(2)28年度に繰り越し申請した科研費は「マンガ言語調査」のために残したものであったが、作業への支払いをしたあと余裕が出たため、松田教授の協力のもと英語版の翻訳にかかり、半年ほどかけて完成した。翻訳版に関してはWEBのみでの公開を予定していた

が、今後の必要性も考え、英語版のみ小冊子として 1000 部を作り、両大学に分けて利用することとした。日・中・韓・英語版は、以下の神戸大学リポジトリに収容されている。以下に日本語版のマンガ PDF データを付し、神戸大学リポジトリの URL を付す。

Kobe University Repository Kernel
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_public/G0000003kernel_90003876

(3) 『マンガ言語調査』の先鞭

実際の制作から得られる体験的知識の他に、同時に研究として行なうべきこととして、マンガをひとつの新たな言語として見るならば、その性質と機能を明らかにしていくべきであると考えており、日々発展し変容するマンガ言語を使用する試みに手をつけたいと考えた。以下はその最初の試みである。

マンガ言語は、例えば「走る」「怒る」「笑う」などの動詞から「美しい」「苦しい」「見事な」などの形容詞まで、機能のみの単純さで仕分けすることは可能だが、そんなことをして意味があるとは思えないほどに、現代のマンガ言語は多様で複雑に発展している。「泣きながら笑う」「しずかに激高する」など複合的な動詞にするのは当たり前で、今も発展を続ける流動的なものであり、正解は、ない。故に、これが正しい使い方、誤用をしてはならないというような規律・文法はどこにも存在しない。しかしながら、その自由度を活かしつつも、社会合意形成やルールの理解、難解な内容の知識を得るためなどに、これからはマンガの広報力や解析力、印象づける力などが利用されていくはずだ。その中でマンガを創る側が知るべきは、以下のようなことである。マンガ言語が長い時間の中で、避けられない社会との関わりを持ちつつ、どのように使われて（あるいは創られて）どのように変化していくのかを理解し、何を省いたら読者は理解できなくなるのかを身に染み込ませておかねばならない。誤用の例や初めて使用された時の動機なども、確認するに越したことはない。成長し、盛り込まれ続けているかと思えば、あるとき急に省かれて一部を表現しなくなるのは、読者のリテラシーの向上により、表現が過剰に感じられるようになるためだ。それが起こるときには、全く何の予

兆もなく断りが入れられることもない。表現言語とはそうしたものであり、読者との共有によってつくられる「ことば」なのである。

思いのほか時間がかかったデータ収集とその意味付けを文字化して、Excel データとして表にし、研究的視点でのコメントを付加した。予定通り全て完了したとは言えない部分もあるが、それについては今後も付加を続け、資料価値を高めたい。さらに選択したマンガ言語とそのデータは、膨大な数に及ぶマンガのごく一部であることを付け加え、同様の分析が今後も続けられれば、さらに意味のあるものとなることを予言したい。基礎的な意味でのマンガ言語は現在、ほとんど完成しているようにも見えるため、時とともに流動して、止揚し難いほどに多様化する前にアイデンティファイが必要なのではないかと考えられるからである。

この「マンガ言語調査」が示すことは、マンガ言語がどれほど日本語とつながりが深いかということと、文字としての表現をどのようにマンガ言語に翻訳し利用して来たかということである。それと同時に社会の変容がマンガ言語にも影響を及ぼし、ひとつ発達や変化が始まると、ほとんど 2 年程度以内にその変化は完成し、次の段階に移り行く。それは少女マンガ・少年マンガのカテゴリーにはそれ程の違いがないことも判る。この調査結果（変容しやすいこと）を見ると、機能マンガにおいては、言語としてどこまでが守るべき範囲であるかを考えざるを得ない。飛躍する言語的变化は面白くとも、可能な限り多くの読者に理解を促すべき機能マンガの役割においては、採用してはならない変化なのである。

そうしたことに気づく時、マンガはどこまでも万能ではなく、いつしか変容しすぎて大多数には通じない言語になる可能性も否めない。最も大多数に通じる言語的形態を求め基礎として止揚することが出来るならば、マンガは新たな言語として将来も存続し続けることが可能であろう。当然、マンガを教育する場においても、有効性を持ったメソッドを形作ることが可能となる。

方法としては、マンガの言語的表現の発達を調べるため、発達のスパンを大体 5 年と仮定して 1950 年から 2000 年まで 5 年ごとに

分け、少年マンガと少女マンガのカテゴリーに分ける。その上で言語的表現を 10 個のカテゴリー別に、1.吹き出し形状 2.走る 3.オノマトペ 4.ハッと気づく 5.叫ぶ 6.赤くなる(恥ずかしい) 7.部屋を出る 8.泣く 9.強い否定 10.激昂に分け、それぞれ 10 例ずつを図版で集めることとし、偏りのない調査になるよう、あえて意図を理解しない学生に収集させた。それらを Excel の表に落とし込み、簡単に比較でき、微妙な差異を確認できるように試みた。こうして見るとマンガの言語的発展や変化は、偏りのない一般的なものであることが証明される。

このような調査はこの先も出来るだけ多く行ない、もっと様々な表現形態を言語的な見地から分析してみることが出来れば、本当の意味でマンガ言語の存在を証明することが可能なはずである。この表から読み取れることを使って、マンガ研究一般も機能マンガ研究も、さらに具体的な方向へ進むことを願う。先鞭に過ぎない試みではあるものの、将来への道の端緒となることを祈って。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](1件)

小論・機能マンガの創成と提案(『21世紀倫理創成研究』5号 2012.03)

http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ethics/research/journal/JIE_vol5_contents.pdf

これはこの科研費によるところの論ではないが、この研究活動を始める前に行なった神戸大学との共同マンガ制作作業から、科研費獲得に至る大きな理由となった動機がここに表明されているため、この研究の前段として挙げておきたい、ここに加える。マンガという領域が学問の世界では全く新しく、現在は研究領域として存在しないため、違う領域でこうした文を載せること自体が稀である。その扉を開いてくれたという意味で、共同研究者である神戸大学・松田毅教授に深く感謝の意を表したい。

〔その他〕

『マンガと哲学の対話』～アスベスト問題に対する人文学的研究の展開～

於：東大 UTCP (東京大学駒場キャンパス

KOMCEE WEST 302) 2016.09.03

本研究のまとめとして京都精華大学にてシンポジウムを計画していたが、神戸大学人文学研究科から東大 UTCP へ研究員として移動した「倫理創成プロジェクト」メンバーから、東大 UTCP にて一般聴衆も含めたカンファレンスが行なえるとの可能性が示され、それをもって本研究のまとめとしたいと考え、実行した。この試みは東大 UTCP (東京大学大学院総合文化研究科・教養学部付属の「共生のための国際哲学研究センター」)において行なわれている、一般聴衆を巻き込んでの分野を越えた哲学的考察のカンファレンスである。参加者の数はそれ程多くはないが、知的な考察とともに発言をさせる場になっており、聴衆に対して、一方的ではない双方向の形で情報を伝えられる。参加者にはそこで交わされた質問や答えが参加した意義となって残り、今後の持続的考察にもつながっていく仕組みだ。

ここに特記すべきは、京都精華大学マンガ学科でもまだ「社会合意形成のためのマンガの機能」を教える授業構築には至っていないにも拘らず、卒業後、単独で社会合意形成のためのマンガを創っていた卒業生が発見され、その報告を受けることが出来たことである。四日市公害は既に過去のものとなっているが、それを知らずに生きる市民に対し過去に存在した社会リスクを告げるものとなっており、現在進行形ではなくとも過去にあった社会リスクを知ることが、また別の意味で未来を救う可能性につながることを知らしめたことは、大きな意義がある。また、一般の聴衆にとってアスベスト問題は、もうこれ以上将来には出てこないだろうと思われており、まだこれから近い将来にわたって被害者のピークが来ると聞いて驚いていたのが印象的だった。

その記録は『マンガと哲学の対話』～アスベスト問題に対する人文学的研究の展開～研究報告」として対話形式のまま文字化し、印刷も可能なものとして記録した。

6. 研究組織

(1)研究代表者

氏名：竹宮 恵子 (Keiko TAKEMIYA)

研究機関名：京都精華大学・マンガ学部・教授

研究者番号：80330033

(2)研究分担者

氏名：松田 毅 (Tsuyoshi MATUDA)

研究機関名：神戸大学・その他の研究科・教授

研究者番号：70222304